

---

# 俺とバカどもと幻想郷

サイクス

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

俺とバカどもと幻想郷

### 【Nコード】

N0684Z

### 【作者名】

サイクス

### 【あらすじ】

ある者から追われ、瀕死の重症を負った神楽一族の生き残り。そして一部の記憶も失ってしまう。旅に出たその者の行き先はバカテスの世界！？他のオリキャラも出す予定です！  
初めての作品で未熟なところもありますが、よろしく願います。

## すべての始まり

それは・・・些細な出来事だった。

幻想郷にて

????「ハア・・・ハア・・・ハア・・・」

俺が気が付いたときはもう、体力も限界を超えようとしていた。両手は血で染まっている。足もフラフラだ。視界まで霞んできやがる。

????「くそっ！このままじゃ・・・！」

追っ手1「いたぞ！逃がすなあ！！」

追っ手2「殺してでもそいつを奪え！！！」

ちっ、もう追いついてきやがった。あまり使いたくはなかったが・・・！！

????「炎符『フレアグレネード』！！」

咄嗟に放った俺のスペルカードは火を噴き追っ手たちに襲い掛かる。同時に俺の体から力が抜けていくのがわかった。・・・調子に乗りやがって・・・！！だが。



？「あら、ようやく目覚めたのね。さすがは一族の生き残り。たいした生命力ね。」

????「あなたは……？俺を知っているようだが……。」

この家の主らしき女性がそこにいた。金髪の髪を下ろした綺麗な人だった。

紫「私は 八雲紫。あなた、名前言える？」

????「ん？あれ……。わからない。この幻想郷の最低知識以外

なにも出てこない。思い出そうとしても……何もなし……。」

紫「困ったわね……。名前がわからないじゃ……。」

考え込む紫、困ってるようなのである提案をした。

????「……あなたはさっき、『一族』と言いましたよね。一族と言っからには

何か苗字があるのでは？」

と、恐る恐る聞いてみる。え、何で敬語なのかって？

まあ、この人見るからに強そうだし。カリスマ、というかなんといつか。

紫「ええ。あなたは古より伝わりし『神楽一族』。この幻想郷の中でも

トップクラスの戦闘能力と地位を持つ一族ね。」

それを聞いて俺は啞然とした。それって……

神楽(?????)「それって大昔に滅んだ一族ですよ。どういうことですか!？」

紫「それが生きていたのよ。貴方だけね。」

神楽「え……?~~~~~ツ!分からないことだらけだ!」

取り乱す俺を紫は優しく制する。

紫「落ち着いて。……そうね、まずは貴方の名前、考えましようか。」

それには俺も同意見だ。

どうか、崩壊的なネーミングセンスじゃありませんように……!

## すべての始まり（後書き）

初投稿です！未熟ですがどうかよろしく・・・  
えっと、更新スピードは不定期かもです。

次回は紫が神楽の名前を決める・・・のか？

## 第一問（前書き）

二話目です。

一週間に2回の更新を目指しています。

それでは、どうぞ！

## 第一問

八雲邸

紫「それで……あなたの名前だけど……あなたの髪と目、空色だから……」

『空護』なんてどうかしら？」

神楽「空護……か……うん、いいかもな。これから俺の名は『神楽空護』だ。」

あれ……意外とあっさり決まったもんだな。

どこぞの稗田さんみたいなネーミングセンスだと思ってたんだが。

(これは作者の勝手な想像です、お気になさらず)

紫「本当ならここに泊めてあげたいところだけど、生憎空き部屋がないのよ……」

だから、私が泊まるところを探してあげるわ。」

空護「そうか、それは助かるよ。すまないね。」

そついうと紫はお馴染みのスキマ空間を開ける。

その時、俺の頭に違和感があった、いやできたといった方が正しいか。

これは……境界移動の知識が俺の頭に……流れ込んで来る……！！

空護「ちょっと待って。」

紫「何？」

空護「2つ確かめたいことがあるんだ、いいかな？」

紫「ええ、構わないわ。」

と、紫も承諾してくれたところで、俺はさっきの知識を元に紫と同じ境界を開く動作を試みる。

すると案の定、紫と全くとまではいかないが、同じ境界が開いた。

紫「！・・・あなた・・・その能力！やはり神楽の血を引いてるだけはあるわね。」

驚愕に目を見開く紫、無理もない。自分特有の力が他人に易々と使われたのだ。

驚かないほうがおかしい。

空護「紫の境界を開く動きを見たら、頭に情報が流れ込んできたんだ。」

それと、二つ目だけど、俺の刀、知らないか？2本あるんだけど。」

紫「ああ、あれね。今持って来させるわ。・・・藍？例の刀持ってきて頂戴！」

藍「はい、ただいま。」

しばらくして、藍と呼ばれた女性は確かに俺の刀を持ってきてくれた。

空護「君が藍だね、俺は神楽空護だ。よろしく。とにかくありがとうな。」

藍「いえ、お気になさらず。」

紫「2人ともいい雰囲気のところ悪いk」どこがだ！（ですか！）  
分かってるわよ……。

それで？2つ目は？」

空護「ああ、俺が覚えてる限りは、神楽一族は皆、2つ能力を持つ、と

教えられた記憶があるんだが？」

ん？いつの間に敬語じゃなくなつたつて？まあ、危険な奴じゃないことは確かだし、

第一俺は、堅苦しいのは苦手なんだよ。

紫「その通りよ、あなた少し記憶が戻って来たんじゃない？つと・  
・質問の答えね、

あなたの言う通り神楽一族は、必ず、2つ能力を持つのよ。そして、

あなたの能力が今で目覚めた。」

なるほど、俺の勘はあってたわけだ。そうするあとは……

空護「能力の名前……どうするかな？」

紫「そうね……ありとあらゆるものを学習し使役する程度  
の能力」

なんてどうかしら？」

長いな……ま、でもいつか。とりあえず身を守る術はできた。

紫「さて、そろそろ行きましようか。藍に頼んだ結果だけど、守矢  
神社。

そこが引き受けてくれるそうよ。」

空護「そうか、何から何まですまないな。……んじゃ、行つてく  
る。

またここに来てもいいか？」

紫「ええ。いつでも歓迎するわ。」

にこつと笑顔を浮かべる紫。……やべ、かわいすぎる／＼／

そして俺は境界を開き中へ入った。

## 第一問（後書き）

次は、プロフィール紹介でもしよかなと思います。

## プロフィールとか

オリキャラ

名前 神楽空護かぐらくうご

見た目は、雄二と明久を足して2で割った感じ。

髪と目の色は空色で、怒りなどで制御不能になると、髪は赤、目は金色になる。

年 見た目は16、7辺り。実際は結構いつてる

能力・ありとあらゆるものを学習し使役する程度の能力

・頭に描いた物を具現化する程度の能力

(用は、あらゆるものをつくりだせる。生命等は不可)

所属Fクラス

紫の推薦で文月学園に編入してくる。

空護が、Fクラスで構わないというのでFクラスに。

紫によると、「かなりできる子」とのこと。

召喚獣

普通の装備は赤黒い甲冑で、FF7のセフィロスみたいな長い刀を持っている。

状況に応じ戦闘スタイルを変えられるが。10点を消費する。得意教科は、数学と英語以外全て。調子がいいと一教科800点を超える実力の持ち主。

数学辺りになると200〜300辺りまで落ちる。

腕輪

400を超えると基本的にスペカやFF、テイルズの技と同じ様な物が見える。

700点を超えたときのみ、幻獣を召喚できる。

バハムートやリヴァイアサン

等、教科で変わる。

引き取り先の守矢一家は作者の想像でゲーマーということになっている。

故に、ゲームの操作も慣れている。

## プロフィールとか（後書き）

とりあえずこんな感じですよ。

次回かその次辺りでバカテス編へ突入したいと思います。

## 第二問

### 境界

引き取り先に藍を待たせてるから、わかるはずよ。

って言ってたっけ紫は。にしても・・・

空護「この目ん玉どうにかならないかねえ・・・気持ち悪くて仕方がない。」

まあなんにせよ、剣も守れたし、行き先見つかるし、紫に感謝だなん？見えてきたな・・・っし！

ズズズズズ・・・！スタッ

空護「よ、待たせたな！」

藍「あ、空護さん。こちらです、付いて来て下さい。」

少年・少女移動中・・・

藍「着きました。ここです。」

空護「おう、サンキューな！」

お礼にとびつきり(？)の、恐らく人生初の全力の笑顔をおくってみた。

藍「／／／／／／／／、それでは失礼しますっ！／／／」

なんだ？やけに顔が赤かったような・・・。

？「おや、ようやく来たのかい？」

少し歩いたところにいたのは、なんか、ものっそいでかい注連縄をした人だった。

これも、紫とは違ったカリスマ・・・なのか？

空護「すまない、またせたな。」

？「気にすることないよ。さ、こっちだよ、着いてきな。」

空護「ああ。・・・ところで、名前は？」

俺は神楽空護。」

加奈子「私は、八坂加奈子だよ。一応言っとくと私は神だ。他にも2人いるけど、

着いてから話すよ。」

空護「そうか。兎に角行くでしょう。」

・・・・・・神？

神ってあのなんかやたらと皆信仰してるあれ？

まあ、そこは突っ込んではいけないところなんだろう。

少年・神移動中………

### 守矢神社

加奈子「おーい帰ったぞ。」

?「お帰りなさい八坂様。諏訪子様！お帰りになりましたよ。」

??「あーうー、お帰りー。ってそっちの子は？」

なんだろう、いろいろと突っ込みどころがあるような気がするのよ。  
……

俺だけか？小っちゃい方の帽子とか、加奈子の注連縄とか。

加奈子「前に話したでしょうが。あの、神楽の生き残りの子を引き取るって。」

「この子だよ。」

空護「神楽空護だ。よろしく頼む。」

早苗「東風谷早苗です。この神社で巫女をしています。」

諏訪子「諏訪子だよ。」

うん、まあいい人達ってのは確かみたいだな。

俺としても助かる。……………あ。

空護「そういえば俺、紫から手紙もらってきたんだ。着くまでは読むなって言ってたし、

折角だから、皆で読むか。」

早苗「そうですね。……にしても、なんて書いてあるんですかね？

あの人、何考えてるかわかんない人ですから。」

加奈子「確かに、あの紫だからねえ……………」

……………すごく不安になってきた。

っていうか紫、あんたは一体何をやらかしたんだ？

ま、まあ気を取り直して読んでみよう。

空護＋守矢一家へ

これを読んでいるという事はもうそっちに着いたみたいね。

突然だけど……………空護、貴方と早苗は明日から学校に行つて貰うわ。

制服、文具その他諸々はこっちで用意するから、ある程度準備しておいてね。

あ、ちなみに行つてもらつるのは『文月学園』というところよ。

そついうわけでよろしく

b y 紫（17歳？）

……？ナニコレ、ドユコト？  
って、はあああああ！？

空護「ということだよこれえ……。」

早苗「やっぱり、何かあるんじゃないかとは思ってましたが

まさかこれとは……はあ。」

空護「まあ、いいんじゃないか？こちらに不利益と言っわけではな  
さそうだし。」

加奈子「そういうことだ。早く準備しな。」

なあ、何故あなたは楽しそうなんだ？  
そして、諏訪子が結構空気だったな……

## 第二問（後書き）

やっと4話です。

次回ついにバカテスワールドへ……？

### 第三問（前書き）

今回から台詞の人名を無しにしたいと思います。  
読みにくくてすみません・・・

### 第三問

はいどうも空護です。とある事情で今俺は八雲邸の前に来ております。

え？何でかって……そりゃあ、ね？

いつもの面倒ごとですよ。ただ、学校に行くだけってコトです。ただ……

文月学園って……前に聞いたことあるんだよね……。

八雲邸

「……きたわね。」

「ああ、つたくいきなりすぎないか？」

「だめですよ空護さん。紫さんも考えがあつてのことだと思えますし。……多分。」

「あ、それと2人とも、学校では貴方たちは姉弟として通ってもらわね。」

……え？また爆弾発言？

はあ、もう、いい加減慣れてしまった自分がある……

「わ、私と空護さんがですか！？／／／／」

俺の横でめっちゃ顔を赤くしている早苗さん。んな恋人になるわけじゃあるまいし。

……いや、向こうへ行ったら早苗姉さんになるんだっけ。

「そして、貴方たちの監視兼守り役として妹紅に付いて行って貰うわ。」

「初めまして……だな。あたしは藤原妹紅。竹林の案内をしている。よろしくな。」

「神楽空護だ。よろしく。」

……今になって気づいたが、なぜ監視役がついてるんだ？

「何故監視なんて聞かないでね。あなたが暴走したら洒落にならないから。」

何故考えてることが分かる……ってか

「なんで俺の暴走が前提になってるんだ？」

「話してなかったわね。……過去に貴方は力……いえ、貴方に流れる様々な血が……」

貴方を暴走させ……1つの地域を壊滅させた。後に『白昼の悪夢』と呼ばれる出来事よ。」

……俺は一体何をしたんだ？なんだろう自分か怖くなってきた。

……え？様々な……血？帰ったら紫に聞いてみようかな……

「ん？もうこんな時間か。早く行ったほうがいいかもな。」

「そうですね、紫さんお願いします。」

「分かったわ。さ、準備して……っってもう準備万端ね。」

紫はそういつと指で空気をなぞるように動かす。すると見慣れた境界が開いた。

「……んじゃ行ってくるわ。」

「ちなみに、向こうにマンションの部屋を用意してあるから。いつでもこっちと出入りができるようにね。」

「そうか。礼はいつとくよ。」

「そんじゃ……行くか!」

そして俺たちは境界に入り別の世界へ向かった。

### 文月学園前

ズズズズズ……スタツ

って目の前に学校あるんですけど!?!……まあ、でも。

「へえ……結構いいところじゃん。ん?あれは……先生か?」

「そうみただな。……おーい!」

「ん？ようやく来たのか。俺は西村宗一。補習担当の教師だ。」

そう言ってきたのはすっごくごつい人。第一印象はそれだ。

「俺は東風谷空護、こっちは俺の姉さんの早苗。」

んでもってこっちが……」

「藤原妹紅だ。よろしく。」

「（小声）なんで同じ苗字にしたんです？」

「（小声）その方が姉弟って感じが出るからね。それと話し方もそんな堅くなくていいよ。」

俺そついうの苦手なんだ。」

しばらく小声で会話したあと、俺たちはとりあえず西村先生についていった。

少年少女移動中

「よし、お前たちはここで待っている。」

ん？ここは………学園長室か？

結構設備は悪くないな？

にしてもここで優雅な学校生活は送れるのだろうか………

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0684z/>

---

俺とバカどもと幻想郷

2011年12月14日14時48分発行